

釣りに釣られて

高原英夫

第二十二回 「東日本大震災」

この文を書き出すのに、随分な躊躇いがある。その訳というのも、実の事を言えば、二十一回までの文はあの東日本大震災の前に書き終えていた。そして津波での壊滅的な被害の様子をTVの画面で繰り返し見るたび、すっかりペンを持つ手が萎えてしまったのだ。あれから数ヶ月が過ぎてやつとまた書き始めている。

釣りを通じて海や溪流の自然を楽しみながらも、何度か、時に牙をむく自然の恐さを体験し、書いてはみたものの、あの震災の凄まじさに比べれば、私の体験したことなどは、蚊に刺されたことほどにも成る筈もなく、あまりに微小で些細に思えてくる。

人が自然という時、美しく、人の手に汚されていない姿をいうことがほとんどだ。しかもその自然も地球の地べたにへばりついて暮らしている人類にとっての自然である。

かつてソ連と言っていた時代、人類初の地球一周の宇宙飛行をしたガガーリン少

佐は、

「地球は青かった」

と言った。一九六一年、私達はこの言葉の意味がよくわからなかった。やがて、カラー写真で、映像でと宇宙から見た地球の姿を見るにつけ、なるほど「青い」と思えた。地球がほんとうに薄い皮膜のような空気で覆われた惑星であり、それは、身近な言い方だと、青森市から八戸市までは約百キロメートルで、その分を空に向かえば大気圏外の空間で宇宙と呼ばれる。そして仙台あたりの距離を天にのぼったところを、あの国際宇宙ステーションが地球を周回している。そうだ、人間の住める環境は平面には広大な地球でも、天に向かつてはほんのすこしの空間でしかないのだ。エベレストの山頂に人は行けても住めはしない。

その、奇跡的に生物が生き延びられる環境がつくられた地球の、そのまた極地でもなく砂漠でもなく、気候に恵まれた所に私達は住み、清々しい朝日を迎え、茜色に染まった空に神々しい夕陽を送る。

それがほんのすこし狂う、揺れる、それだけで人間はたちまちのうちに打ちのめ

されてしまう。自然からすれば、それは自おのずと然しかりで、あるがままで何の意図もあるはずがない。しかし、そこに住み、生活をする人間からすればそれが一生であり、人生であり、その間に見えるもうあとは取り戻しようがない自分から見た宇宙、自然なのである。

千葉市に住む日本の少女が、東日本大震災に関してローマ法王に、「同じ年頃の子どもがたくさん亡くなったり、なぜこんなに悲しいことになるのか、神様とお話ができる法王、教えて下さい」と問うた。法王は「私も同じように『なぜ』と自問しています」と答えたという記事を東奥日報で読んだ。そして法王はさらに、「いつの日かその理由が分かり、神があなたを愛し、そばにいてくれることでしょう」と続けている。

これは多分、どんな災害の時でも、また親しい誰かが亡くなった時の共通の問いであろうし、答えなのだと思う。神は誰を守り、救おうとしているのか、生と死の境と、かつ精神を持つ人類が常に問うて来たことに違いない。生きているからこそその人生で考えるのか、死後、宗教も含めての人間なのか。それにしても人は常に救

いを求め続けてきた。

私自身は大きな震災には遭っていない。ただ一九六〇年五月のチリ地震津波の時に小学生だった私は、内陸に住んでいて何の被害もなかったが、朝礼で講堂に集められた子ども達に先生が話す八戸の様子がただただ恐ろしく、戦っていた。そして毎日の様に朝早く八戸からガンガラに鮮魚を詰めて汽車でやつてくる行商のおぼさんから聞いた体験談は、この齢になるまでも何度か夢に見てうなされるほどの怖さがあった。ただその夢の中の津波の色はなぜか紺碧だった。

地震の被害は、中国では一九七六年唐山で、二〇〇六年四川省で、一九九九年にはトルコで、津波は二〇〇四年スマトラでと、他にも多くの所で多大な犠牲者を出している。

私達は神、いや自然によって生かされているのだろうか。だからその「生殺与奪の権」がその手に握り続けられているのだろうか。

その自然が怒らないように、宥めるようにしか人間は生きていけないのだろうか。

自然の本当に機嫌のいい日、そして人間から見て好ましい所で、私達は生活をさ

せてもらい、遊ばせてもらい、またそれを愛でている。宇宙の起源、そしてこの地球が生まれて四十数億年というが、人間は、その時間でいえば一瞬とさえいえないほどの短い時を過ごし一生を終えていく。

さらに俯瞰をすれば、この大地、地球でさえ無くなる日が来るというのだ。もつとも、数十億年も後のことだというが、太陽は恒星であり、その進化からみれば赤色巨星へと膨脹する時が来るのだそうだ。その時は地球さえも呑み込むほど大きくなるというのだから、もうこの地面がなくなるのだから話の続けようがない。どこかの惑星に移住でもしない限り、人間の頭脳が知り得た知恵も科学も、何もない元の宇宙の塵となる。

「自然」に対応する言葉として「人工」とか「人為」とかが適当なのだろうか。しかし、この際の自然は「人の力では予測できないこと」が最も適した意味だろう。もうひとつ言えば「人知の及ぶところではない」ということになるだろう。

中部電力の浜岡原発が、文部科学省の想定によると、三〇年以内にマグニチュード八・〇程度の東海地震が発生する可能性が八七％と、極めて高いからということ

で全面停止となった。しかし、それ以前に福島沖の地震、しかも日本史上最大の地震発生への予測は、全くといってなかつた。どんな占い師からの予言さえもなかつた。それほどまでに「人知」は「人知」なのだと言える。ただ経験上は過小評価したといわれている。八六九年の貞観津波、一九三三年、一九九六年の三陸地震津波は知られていたわけだが、なにしろ予想を超えてやってきた。ただこの地球の歴史から考えると、日本列島が大陸から完全に分離して形成されたのが二〜一万年前ほどだという。その間、百年あるいは千年に一回の予想外といわれる津波を、この三陸地方は何十回何百回受けて来たのだろうか。だとすると予想外とは何を指すのだろうか。

科学は太陽系の最期を予測し、宇宙の進化を探り、原子から素粒子からさらにと物質の根本にせまっていっている。これも自然を人知が解き明かしている人知には違いない。だが、改めて本当に $1+1=2$ なのだろうか。人の知恵として思うっているだけで、人間同士でしか使えない数式ではないのだろうかとも思えてくる。

科学の進化が行き届かないから人知の及ぶところがないのではなく、自然は、宇宙は、地球は、人間は自然の成生物としてその域の中にいるのだということだ。

つけて加えて原発事故問題だ。人間は核分裂により自然界にない放射性物質までつくり続けてきた。しかし、人間は本当に原発を、そしてそうした物質をコントロールできる能力を持つているのだろうか、そしてその責任をどう果たせるのだろうか。今はとても一度起こした事故の制御をやれているとはとても思えない。津波が想定外という人知の限界もそうだが、原発・核エネルギーそのものへの疑問なのだ。これまで自然界には放射線が何マイクロシーベルトとか有り、それは安全だと聞いてきた。安全神話がどつかりと頭の中のどこかに居着いていて、チェルノブイリとかスリーマイル島などのようなことは几帳面な日本人の国民性からしても我が国では起こらないものと思いつけてきた。

そういうことからすれば、何ミリシーベルトが、人体にとってどう有害かなどという話は本来知る必要のなかったことだ。しかしニュースで見聞きしていると、その基準さえ一体どうなんだという疑問さえ出てくる。不幸にして、シーベルトが少

し理解できた時はすでに事故は起きていた。いや起きたからこそ聞こうとしたのに
違う。ましてやベクレムなどという単位のことなど初めて知ったことだった。

いずれにしても、原発について相当大きな疑念が日本国中を覆っている。そして、
人間の奢りからともいえる事故に無関係な人にまでとてつもない苦痛を強いてい
る。大津波という自然からの時ならぬ警鐘というにはあまりにも多くの人命が失わ
れ、そして人類のエネルギーに対する考え方の転換を迫っているように思える。

改めて、この場を借りて、東日本大震災で被災された方々に心からのお見舞いを
申し上げます。

やはり人間として生まれた以上は、食べ、仕事をし、考え、楽しんで人生を生き
抜かなければならない。それがこの地球に生かされた生物として進化した人間の成
さねばならない行為だ。

今日を生き、明日を信じ、被災された多くの方々の元に再び明るい生活に戻るこ
とを心から願ってやまない。

平成23年10月